

スローイン後のプレーと有効攻撃の関連の研究

Analysis of relation play after taking a throw in and effective attacks

1K10C117 加賀 雅士

主査 堀野 博幸 先生

副査 石井 昌幸 先生

【目的】

サッカーに於いて、手を使えるのはペナルティエリア内のキーパーと、スローインのみであるにも関わらず、同じセットプレーでもフリーキックやコーナーキックと比べると研究や現場レベルでのトレーニングに割かれる時間が同じセットプレーにも関わらず少なく、スローインのモデルプレー構築が必要であり、改善の幅が大きいのではないかと考えられる。

本研究では、スローインでのプレー再開後、相手ゴールに近づくこと、有効攻撃に至ることができたのか否か、またその場合の要因はどんなものなのかを検証し、状況に合った適切なスローインを導き出すことを目的とする。

【方法】

UEFA 欧州選手権 2012 ポーランド・ウクライナ大会の全 31 試合で行われた全スローインを抽出し、分析を行った。

抽出したスローインを 11 の場面ごとに分類し、ディフェンディングサード・ミドルサードではスローラインをこえて前にボールを運べたか否か、アタッキングサードでは有効攻撃につながったかどうかの分析を行った。また、どのような要素が有効、非有効、侵入、非侵入を決定づけたのかの分析を行った。

【結果】

タッチを割ってからスローインが行われるまでの平均時間は、侵入、非侵入間で t 検定の結果、有意差はみられなかった。

侵入、非侵入間で、「前」方向のスローにおいて二項検定の結果、母比率に比べ非侵入数が有意に多く、「斜め後ろ」方向では侵入数が有意に多いことが認められた。

「キープ」、「ドリブル」は「前」、「斜め前」方向のスローイン時に有意に多く、「第三者にパス」は「斜め後ろ」方向のスロー後に有意に多いことが認められた。

有効攻撃、非有効攻撃間で、タッチを割ってからスローインが行われるまでの平均時間に t 検定の結果、有意差はみられなかった。

各スロー方向における有効、非有効間で「前」方向のスローでは、二項検定の結果、母比率に比べ非有効数が

有意に多いことが認められた。また、カイ二乗検定の結果「横」、「斜め後ろ」が有意に多いことが認められた。

スローインからの有効攻撃の形は「クロス」が有意に多いことが認められた。

「クロス」に至ったスロー方向は「斜め後ろ」が有意に多く、直後プレーは「リターン」、「第 3 者にパス」が有意に多いことが認められた。

【考察】

「斜め後ろ」方向のスローインを受けたプレーヤーは、「第三者へパス」を選択していることから、スローインに対して作られたブロックを回避することが、スローインからボールを前に運ぶために重要だと考えられる。

ディフェンディングサード、ミドルサード同様、「前」方向のスローの際には有効、非有効を決定づけるのは個人能力であることが分かり、よりプレッシャーが少ない「斜め後ろ」方向のプレーヤーにスローし、「第三者へパス」、「リターン」などコンビネーションプレーでスローインに対するブロックを打開することが効果的であると分かった。

【結論】

セットプレーの一つであるスローインにおいて、どのような要素が次のプレーのために有効なのかを調べることを目的とした。先行研究から、守備が整う前に攻撃を始めること、整った場合には、しっかりとボールを回して攻めることが重要だとされていたが、この研究ではタッチラインを割ってからスローインを行うまでの平均時間に侵入、非侵入間、有効、非有効間に差が無く、どのエリアでも前向きのスローインは非侵入、非有効が多く、後ろ方向のスローイン後に侵入、有効攻撃に至ることがわかった。

また、ほとんどのシーンで攻撃側の数的同数もしくは、数的不利の状況であったことからそのことが言えるだろう。タッチを割ってからスローインが行われるまでの時間が侵入、非侵入、有効、非有効に影響を及ぼさないことから、スローイン時にはしっかりとスローラインより後ろの地域でパスを回しながら、侵入、有効攻撃を伺うことが適切だと、この研究で明らかとなった。